

ろくおん通信

発行日： 1992年10月15日

No. 47号

発行者： 盲人情報文化センター録音製作

## 図・表・写真などの音声訳について〔3〕

### 3. 具体的な処理の方法のつづき

#### [3]本文中に入れる時はどこに入れるか

テープ図書では墨字の本と違って、とばして先を読んだり、戻って読み返したりする作業は容易ではありません。従ってそのまま聞いて行けばいいような作り方をすることが理想です。

例えば、図や表を見ながら本文を読まないで本文が理解できないような時、本文のあとで図や表を入れたのでは困ります。

又、時には二つ以上の事柄を一つの図（又は表）にしたものがあります。墨字の本を読む時には、本文の途中で何度も同じ図（表）を見直すことになります。このような図（表）をはじめに出て来た時に全部説明して後は本文だけ読むのでは、後の方の本文は理解しにくいこともあるでしょう。このような場合には、はじめに図（表）などを入れる時に断って、一つの図（表）を何回かにわけて説明するという方法も考えられます。

ex. 「図〇〇〇の中に、A, B, C三つの図があります。ここでは図Aを説明し、図B, Cは後の本文の関係のある所でそれぞれ説明します」

入れる所を決めて、説明の文章が出来たら、必ず一度前後の文章と続けて読んで見て下さい。思いがけない矛盾を発見することもあります。本の作り方は様々です。図・表・写真などをどこに入れるか一つ一つ慎重に決めて下さい。

### 4. 絵、写真を説明する時

ここでは、絵（写真）を説明する時の注意点を上げてみます。例文として上げたものは、一枚の写真についての説明文です。適当なものには○、不適當なものには×印をつけてあります。

◆まず、全体像を説明する。

(2) 『ろくおん通信』 NO. 46号 1992年10月15日発行

いきなり具体的な説明をしても何についての説明かがわからなければイメージしにくいものです。

○「超高層ビルが乱立している写真です」

◆次に具体的な説明に入る。

○「細く高いビルが遙か後方まで幾棟も見えます。手前の道路には年老いた女の一人、柄の長いほうきと塵とりを持って歩いています」

◆音声訳者の主観は避ける。

×「窓の上下の間隔が美しい」

×「年老いた女の一人がたった一人だけ歩いている姿がさびしい」

◆イメージしにくい抽象的な言葉は避ける。

◆絵（写真）にある以上の説明はしない。（辞書を引用したり音声訳者の知っている情報を付け加えたりしない）

◆あいまいな物の断定は避ける。間違った説明につながる。

×「清掃人夫が長い柄のホーキとちりとりを持って立っています」

（清掃人夫かどうかはわからない。実際は年老いた女の一人が歩いている）

◆長すぎる説明は避ける。

以上、一般的な説明を上げてみました。

写真集など絵（写真）が中心になる本は別として、一般には、絵（写真）は、本文に書かれたことを視覚にうったえて、本文のイメージをより膨らませるという役割を持っています。本文とのつながりにも注意して見たまを簡潔に説明することを心がけて下さい。イメージの混乱がないか、本文とのバランスはどうか、写真に重点が置かれ過ぎていないか確かめて下さい。

つづく

正誤表から・・・その22

語句	誤読	正しい読み	語句	誤読	正しい読み
彼処	イズコ	カシコ	勤行	キンコウ	ゴンギョウ
宣命	センメイ	センミョウ	人定	ニンテイ	ジンテイ
合評	ゴウヒョウ	ガツヒョウ	軍兵	グンベイ	グンビョウ
質す	シツス	タダス	遂行	ツイコウ	スイコウ

通りの読み方があって各々意味が異なるもの・・・その9

再建	サケン サケン	建て直す（一般） 寺院の場合、神社	行方	件方 ユカ	こころいき、気まえ、生き方 進んで行く先、行くべき方向
造作	ゾウサ ゾウサウ	しかた、もてなし、出費 つくること	有数	アリカ カカ	物のある数、よわい 数が少ないこと、屈指
甲高	カダカ カダカ	声の調子の高いこと。 手足の甲の高く張り出して いること。	空間	アキ ケカ	あいている部屋 物体が存在しない相当に広がり のある部分。

— Q & A —

**Q:** 前回の校正の問題で、校正者は音訳者を育てるという意味のことが書いてありましたが、具体的にはどういう意味ですか。取り方によっては、校正者の方が音声訳者より偉いみたいにもとれますが。

**A:** 前回の書き方が不十分だったようですので補足します。音訳者も校正者も（編集者も）録音図書製作にそれぞれ対等の立場で携わっているものであり、上下の関係がないのは当然のことです。

録音図書の場合、原本に忠実に音声訳することが大切なことは当然で、その為、校正を行うわけですが、しかし、この「原本に忠実」という事は、書いてある通りに読むということではありません。音声訳者は墨字のそれを不必要な記号などは省いたり、音声を変化させたり、言い添えたりしながら読んでいくわけですが、一般の墨字の校正であれば、原文通りになっているかがチェックの対象になりますが、音声訳の場合、元は記号なども含んだ墨字に対して、校正するものは音声ですから、

1. 誤読の指摘に留まらず、
2. 様々な原因による録音の不良（音のゆれ、雑音、反響音など）、
3. 間や、不適切な処理（漢字、カッコなどの処理が不適切な為に原文と違った意味になったり、意味がわからなかったりすること）

なども指摘することになります。1. については、墨字との照合でチェックするわけですが、2. については、録音技術の問題として原因が分からなくても雑音、音質などの問題点を指摘出来ます。しかし、3. については単に墨字との照合だけでは気がつかないものもあります。これらは校正者が一度音だけで校正してみても気がつく問題も多いでしょう。音訳者は読みながら正しく伝わるかどうかを考えながら音訳するわけですが、いろいろ工夫されたものでも、実際に出来たテープを聞くとまったく違って伝わったり意味がわからなかったりすることがあるわけですが、これらの指摘に率直に耳を傾けていくことがよりよい音声訳につながっていくことになり、そういう意味から校正者が音声訳者を育てると言ったわけですが、育つという意味では音声訳者も校正者も、

(4) 『ろくおん通信』 NO. 46号 1992年10月15日発行

互いに勉強し合うことになり共に育つと言えます。

グループ内での校正の場合も、校正する範囲は校正者によってかなりの幅ができることになりトラブルの原因にもなるでしょう。何処まで校正し、何処まで訂正するかなどは一定のルールを設けておく必要があるでしょう。 (清水)

### 音訳研修の会のご案内

日時 1992年11月14日 (土)  
13:30～16:00

場所 盲人情報文化センター9階ホール  
講師 新井洋子氏

内容 ～小説の読み方の研究～  
埋もれ木

### グループ連絡会のご案内

日時： 1992年10月30日 (金)  
13:30～15:30

場所： 盲人情報文化センター9階ホール

内容： 1. グループリーダーを中心に処理の研修。(『ろくおん通信』を題材)  
2. グループケアの研修内容の検討  
3. グループ交流、その他